

合唱歌唱とソロ歌唱の発声比較による合唱教育の一考察

—アマチュアとプロの合唱団員に対するアンケート調査をもとに—

虫 明 眞砂子*

(平成29年6月13日受付, 平成29年12月4日受理)

A Consideration on Choral Education by Comparison of Vocalization between Choral Singing and Solo Singing :

On the Basis of Questionnaire Surveys to Members of Amateur Choirs and Professional Choirs

MUSHIAKI Masako *

How would each member of amateur choirs and professional choirs think of vocalization in choral singing? Then, questionnaire surveys to all members of the choirs were made to resolve the question. Both members, consequently, recognized a base of vocalization to be the same, and moreover they understood characteristics of solo singing and choral singing and intended to sing with vocalization techniques suitable for both singing forms. It was also known they thought a sound of voice was important for singing regardless of singing forms. Advances in vocalization techniques made musical expression growing up and they could perform solo singing as well as choral singing. Moreover, directors should think out a plan for introducing characteristics of solo singing into direction of choral singing, and consequently vocalization techniques in choral education were acquirable effectively, and it was expected awareness of choral singing was made clearer and singing improvement was produced accordingly

Key Words : Vocalization, Choral Singing, Solo Singing, Amateur Choirs, Professional Choirs

I .はじめに

アマチュア合唱の活動は、一般に幅広い年代層の構成員により実施されているが、その活動範囲は学校教育や社会教育の他、さまざまな場に広がっている。日本国内のアマチュア合唱団の数は、全日本合唱連盟のHPによれば、加盟団体数5,105団体(平成28年1月現在)に上っている^(注1)。一方、国内の音楽家によって構成されている、いわばプロの歌手による合唱団は、東京混声合唱団をはじめ、新国立劇場合唱団、二期会合唱団、藤原歌劇団合唱部、東京オペラシンガーズ等、関西・中国地方では、びわ湖ホール声楽アンサンブル、神戸市混声合唱団、津山ヴォーカルアンサンブル、エリザベートシンガーズ等があり、また、テレビ等のマスメディアではフォレストのような音楽家集団のコーラスグループも登場し、このような音楽家集団によるアンサンブルは近年徐々に増加傾向にあるといえる。

以上のように、多様な合唱活動が見られるようになった現況にあって、歌唱における発声に関しては、問題を抱えたままと言える。合唱と独唱(ソロ)の発声の比較に問題を限れば、自分の声をホールの隅々まで届くように歌唱する独唱の歌唱形態に対して、集団で声を合わせ

てハーモニーを作る合唱の歌唱形態では、独唱の時のような個性的な声や声量が、合唱のバランスや統一感を邪魔するという問題がある。

この問題を、ソリストとしての発声を学んでいるものが合唱をする視点から考えてみる。これまで筆者が国内で視察した合唱団では、声量や声質等を調整して歌唱する指導や、ソリストがソロの歌い方のままで合唱すると音色や声質が揃いにくいいため、合唱の声はノンビブラートに変更するような指導がしばしば見られた。しかし、Large及びIwataによると、歌手に同じ音をビブラートのあるなしの条件で歌わせた実験では、ビブラートなしの音では、声門抵抗や内転活動が高くなることが示唆され、歌手がビブラートをかけなかった場合、おそらく、内転に強い力がかかっているのではないかとの考え方が示されている⁽¹⁾。Richard Millerは、イギリスの少年合唱団のノンビブラートの歌声を例に、次のように指摘している。「ノンビブラートの歌声には息がたくさん混ざる音響学的・生理学的な特徴があり、響きが減る傾向にある。」とした上で、「歌声からビブラートを除くには、コントロールして声を締めつける必要がある⁽²⁾。」このように、ノンビブラートの声の出し方は、喉頭への負担の問題も危惧

* 岡山大学 (Okayama University)

される。また、Johan Sundberg は、声質を訓練する上で問題を抱える学生が、同時に、若干異なる発声の方法を学ぶことの問題点を指摘し、合唱とソロ歌唱は、声質として同じ種類ではないということを知っておくことは有益であるとしている⁽³⁾。Franziska MartienBen-Lohmann も同様に、声楽家修行中の人には成人合唱団で歌うことは勧められないとしている⁽⁴⁾。これらの考え方は、合唱とソロの歌唱における声の使い方は異なっており、両者をマスターすることは困難であることを主張している。

実際に、声質のコントロール不足等の理由から、声楽を学ぶ生徒に合唱活動を控えるようにアドバイスする声楽教師も存在すると思われる。一方、フィンランドのヘルシンキ男声合唱団の指揮者 Pasi Hyökki は、「ソリストと合唱の両方の発声を習得することは必要である。」「フィンランドの合唱には、ソリスト教育がないので、音量が少なく響きの少ない合唱団が多い。」一方、「ソリストは、アンサンブルする力が弱い。したがって、ソロで歌う人には、何年も合唱で歌うことが必要であり、他の歌手が何をどう歌っているか聴くことが必要⁽⁵⁾。」と逆の主張を述べている。

本研究では、前述したように、合唱とソロの発声に関する相反する考え方が存在している状況の下で、実際の演奏者自身はソロと合唱の発声についてどのように捉えているのかを調査した。調査は、アマチュアが多数を占めている一般合唱団とプロのソリストで構成する合唱団に対して質問紙を用いて行った。得られた調査結果を分析し、ソロと合唱のそれぞれの形態で発生する課題や両立できる理想的な発声について検討を加え、合唱教育に反映させる方法を考察した。なお、本稿では、一般の合唱団をアマチュア合唱団、ソロ歌手で構成する合唱団をプロ合唱団と呼称する。

II. 合唱の声の捉え方

日本で合唱が盛んになり始めた昭和 30 年代初期には、合唱教本『合唱講座 3 実技編』の中に、次のような記述がある。「合唱の発声練習については、いろいろ議論されています。中には、『発声練習は必要がない。会話のときと同じ声でうたえばいい』といった極端な意見をはく人もいるくらいです。⁽⁶⁾」この記述から、合唱をする場合、発声の重要度は低く、発声練習などがまだ十分に取入れられていないことが推察できる。現在、一般の合唱団では、ウォームアップや呼吸練習、多様な発声練習を取り入れ、ボイストレーナーを招いてボイストレーニングも行っている合唱団が多数存在する。発声技術の向上によって、高度な合唱曲を演奏する合唱団も増加し、その成果は、全日本合唱連盟主催のコンクール等によって聴くことができる。このように、合唱における発声の位置づけは、時代の経過に伴い大きく変化したといえる。

合唱における発声の位置づけが変化してきた一方で、合唱歌唱の問題点も指摘されてきた。発声研究者である Frederick Husler は、合唱で歌うことについて、次のように言及している⁽⁷⁾。「合唱団体こそ、音楽愛好心を世の中に広くもたらし、音楽奨励のための重要な推進役ともなる。」と述べている一方、「合唱を歌うことは、環境が今のようなありさまでは、いつも犠牲的行為によって、声を犠牲にすることによって、あがなわれているのである。」とも述べている。この「声の犠牲」とは何を示すのであろうか。Husler は次のように述べている⁽⁸⁾。「共同して歌うという束縛に屈服しなければならないことは、発声器官にとって非常に危険なことである。発声器官が働くときに従わなければならない個々の合法性は、合唱を歌っている人々は、強制的に、聞き流さねばならないようにさせられる。そこで障害が忍び込む。そして、前もってふつうにある欠点を取り除かれていない声、すなわち『完成されて』いない声は、ほとんどすべての場合、声はすり切れてしまうにきまっている。合唱で歌っている人々の、100 人のうち、99 人までに、それが起こっているのである。」これらは、いずれも合唱団員の発声面での問題を指摘しているものといえる。「共同して歌う」こと、すなわち多人数で声を合わせることも、発声器官の障害をもたらす危険性を指摘している。

また、酒井弘は、合唱の発声指導について、「各人の個性が強く現れるということは、全体の声の統制がとれないことになるので、まず全体の声の統一をはかって個人的な声のでこぼこが、ないように指導しなければならない⁽⁹⁾。」と述べている。合唱の場合、声のバランスをとるために、各パートの音量の調整が重要になる。「合唱の場合には、独唱の場合と異なり、個性的であることが却って邪魔になるので、各人の個性をなくすためにもある程度声を抑制することによって、全体のバランスを考慮することが大切である⁽¹⁰⁾。」この声の個性を抑制することは、発声器官に何らかの悪影響をもたらすのではないかという Husler の考え方にも重なってくる。また、個々の発声の完成度にも直結しており、高度な発声技術を要するものといえる。

ソロと合唱の発声が若干異なると指摘している Johan Sundberg は、合唱歌唱についての研究を 2 例紹介している⁽¹¹⁾。Goodwin は、ソプラノ歌手が合唱またはソリストとして歌唱した場合の声の比較を行い、歌手はソリストとして歌う場合、より大きな声で、また、上音もより大きくなるような声で歌っているとしている⁽¹²⁾。また、Rossing et al. は、合唱とソロの両方の経験を持つ男性歌手について、歌い方の比較を行っている⁽¹³⁾。合唱の声音としては、録音された合唱音をヘッドフォンで聴きながら自分の声を混ぜていくという方法を取り、ソロの声音としては、ピアノ伴奏と歌という設定にしている。この声

音比較では、合唱歌手として歌ったほうが、低い周波数領域にある部分音が強く、歌手フォルマント⁽¹⁴⁾が弱い、すなわち、500Hzのあたりまではソロ歌唱より合唱歌唱のスペクトルの方が強いが、それ以上の周波数になるとソロ歌手の歌手フォルマントの強さのほうが合唱歌唱より強くなるという結果が出ている。これらの2例から、ソロと合唱では、特に声音の音量面での相違が認められる。また、合唱歌手は、合唱団の他の人の音色と混ざり合うように声質を調整するのに努め、ソロ歌手は、個性的な音色を作ろうとしている⁽¹⁵⁾ことがわかる。

合唱指揮者 Walther Schneider が、「合唱の場合には、多くの歌手と関係しなければならぬので、全員が共同で声を調整する教授法が必要になる。その教授法は、バランスのとれた均一な合唱の響きのための前提条件である。特別な天分によって合唱の響きから突出してしまう生まれつきの声も全体の響きの中では、邪魔になることもある⁽¹⁶⁾。」と述べているように、大人数での声の調整やバランスのとれた響きは、合唱で必要不可欠な条件といえよう。また、発声についても、「発声をおろそかにすると合唱団は、不満足な結果、つまり無味乾燥なしばしば無理な響き、貧弱な母音、透りのよくない*p*、狭いダイナミックの音階、不完全な呼吸のフレージング、欠点だらけのイントネーションしか得られない⁽¹⁷⁾。」と述べている。合唱指揮者 Carl Eberhardt も、発声練習の重要性について、「合唱団が最高の響きを達成し、イントネーションの難しさを克服し、レベルを高め、むずかしい危険箇所を乗り切るには、たゆまぬ発声練習以外に方法がないということは明白である⁽¹⁸⁾。」と述べている。柔軟な美しい声の響きや豊かな表現力は、合唱、ソロともに高い発声技術によって導き出される。合唱指揮者や合唱団員は、合唱歌唱における発声の重要性を再認識しなければならないといえる。

以上、合唱歌唱における発声の重要性および合唱歌唱が発声にもたらす危険性を示してきた。しかし、日本の合唱関連の著書や練習本には、ソロと合唱の発声の差異についての記載はあまり見当たらない。合唱指揮者清水敬一は、発声の基礎として、姿勢、呼吸、口の開け方、ブレストレーニング、発声練習、共鳴 母音の統一、お腹で支えること、言葉の発音等を挙げ、これらを歌唱の基礎と捉えている⁽¹⁹⁾。これは、ソロの発声にも共通しており、ソロと合唱は同じであるという立場から述べている。また、「私たちが合唱のための声作りをするときには、西欧古典音楽の系譜と向かい合う機会が最も多いですから、基本になるメソッドとしては、イタリア生まれのベルカント唱法を軸に考えることが自然ですが…中略。マイクを使わない生の声で、楽器としての声を、無理せず十分に鳴らすのに良い出し方がベルカント唱法です⁽²⁰⁾。」と明言している。作曲家である青島広志も同様に、

合唱するための声について、次のように述べている⁽²¹⁾。「合唱の場合、マイクを使わずに広い会場で歌うことになり、また、複数の人間の声を一つに溶け合わせる作業なので、個性的な声では困る」と述べた上で、合唱に適した声は、オペラ歌手の声としている。青島は、その理由を「オペラの発声はもともと広いホールでも充分響かせられ、他の声に溶け込めるように開発された発声だからなのである⁽²²⁾。」と述べ、「声の響き」が「複数の声が溶け込める」ための重要な要素であることを指摘している。同じように、合唱指揮者である田中信昭も、「合唱は、一人ひとりの歌声が集まってできるものですが、その基本になるものは『声楽』である」と明言している。そして、「声楽とは、自分の身体を楽器にして自由自在な息遣いで歌うこと」としている⁽²²⁾。これら三者の意見をまとめると、合唱の発声の基本は、声楽家が目標とするベルカントであることとなる。さらに、田中は、ハーモニーについて、①一人ひとりのメンバーがどのようなハーモニーを作りたいと思っているのか、②みなで合わせようとしているのか、③技術を駆使して音を出しているのかの3点が要であると述べている⁽²³⁾。合唱練習では、基礎となる声作りとこれらアンサンブル技術を歌手が相互にどう高めていくかが合唱表現の大きな柱となるといえよう。

Ⅲ. アマチュアの合唱団員、プロの合唱団員に対する質問紙調査

1. 質問紙調査の概要

(1) 調査の対象：

今回の調査は、早島町、津山市、倉敷市、岡山市、総社市、広島市、神戸市、横浜市、あきる野市、新宿区、市川市、佐久市、川越市、越谷市で活動しているアマチュアの合唱団員、プロの合唱団員に対して行った。一般の合唱団(アマチュア)は38団体516名(男83名、女433名)、プロの合唱団は4団体48名(男16名、女32名)である^(注2)。

(2) 調査期間：平成28年2月20日～平成28年4月20日

(3) 調査内容：

- ①合唱団の年齢構成(アマチュア合唱団とプロの合唱団)
- ②合唱歌唱とソロ歌唱の発声の捉え方(5件法)とその理由(アマチュア合唱団とプロの合唱団：選択式、自由記述式)
- ③合唱歌唱とソロ歌唱にふさわしい声(アマチュア合唱団：選択式)
- ④合唱歌唱とソロ歌唱の留意点(プロ合唱団：選択式)
- ⑤合唱歌唱時の留意点比較(アマチュア・プロ合唱団：選択式)

(4) 倫理的配慮：

本調査では、まず、合唱コンサートの主催者、合唱団

指揮者に対して、調査内容とデータ者の取り扱いについて文書と口頭で説明を行い、理解と協力を求めた。次に、承諾を得た指揮者等を通して、合唱団員へ文書と口頭で調査内容の説明が行われ、同意が得られた団員に対して調査用紙の配布と回収を行った。なお、調査の対象となった合唱団員には、調査結果の論文への使用の了解を得ている。

2. 調査結果と考察

(1) 合唱団の年齢構成

調査対象とした合唱団員の年齢構成を20歳から80歳の間を10歳毎に区分し、更に20歳未満と80歳以上を加えて合計8分類で調査した。合唱団の年齢構成の調査結果を図1に示す。アマチュア合唱団の場合、60歳代が約33%、70歳以上が約35%となり、60歳以上が全体の68%を占めている。40歳未満は約20%と低く、現在のアマチュア合唱団は60歳以上の高齢層が占める割合が高くなっている。一方、プロ歌手の合唱団は、20歳代が35%、30歳代が35%、40歳代が23%と50歳未満が計93%と合唱団の大半を占めており、年齢構成が大きく異なることが確認できた。年齢は歌唱における発声にも影響すると考えられ、合唱団の年齢構成の差は、調査結果を分析する際にも注意すべき点と考えられる。

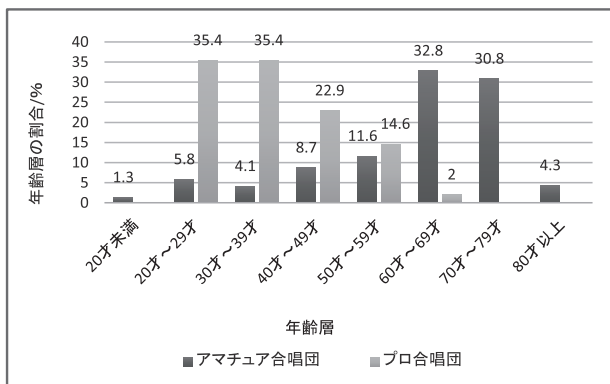


図1 合唱団の年齢構成

(2) 合唱歌唱とソロ歌唱の発声の捉え方とその理由（アマチュアとプロの合唱団）

アマチュア合唱団員とプロ合唱団員の合唱発声とソロ発声に対する捉え方を、「異なっている」から「同じである」の5段階項目からの選択により調査し、選択理由も自由記述により調査した。

まず、合唱歌唱とソロ歌唱の発声の捉え方を選択式で得た回答の結果を図2に示す。アマチュア合唱団では、ふたつの発声について、「異なる・どちらかといえば異なる」が過半数（54%）で、プロ合唱団の56%と大きな差は見られない。これに対して、「わからない」がアマチュア合唱団では約24%と全体の4分の1を占め、プロ合唱団の4.2%と大きな違いを示している。また、発声が「同

じである・どちらかといえば同じである」と回答したアマチュア合唱団員は約22%と回答全体の中では低めの結果となったが、プロ合唱団では、約40%であった。特に、プロ合唱団では、「同じである」と明言している割合が25%にのぼり、アマチュア合唱の8%に比べ顕著な違いが見られる。

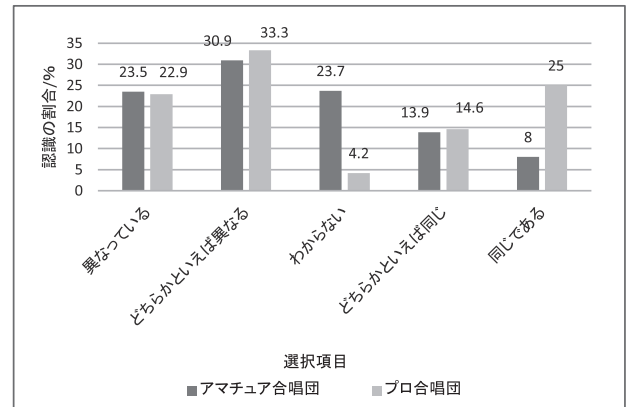


図2 合唱歌唱とソロ歌唱の発声の認識

次に、「合唱とソロの発声は異なるか」の設問に対する自由記述で得た回答を分析する。分析にあたっては、先ず回答を、選択式回答で「同じである・どちらかといえば同じである」を選択した回答と「異なる・どちらかといえば異なる」を選択した回答に分ける。次に、自由記述の中から設問の中心となる言葉と関連した文節を全て抽出し、更にその中で類似性のある単語をまとめ、共通のテーマの下にグループ化を行った。それぞれのテーマには、類似性のある単語（キーワード）を頻出回数の多かった順に記載している。まとめていく過程では、複数の音楽専門家の意見を参考に類型化した。最後に、キーワードとテーマが適切に対応しているかどうかを複数の研究補助者と確認した。以上の手順で得た上位5位のテーマとキーワードを表1に示す。自由記述回答者数は、アマチュア合唱団は、「同じ・どちらかと同じ」では68名、「異なる・どちらかといえば異なる」201名、プロの合唱団は、それぞれ13名、26名であった。なお、回答者数の関係で、アマチュア合唱団のキーワードは3語～5語とし、プロ合唱団は、1～3語で記載している。

テーマは、意見の混在、歌唱技術、合唱の特徴、ソロの特徴、身体の特徴等にまとめることができる。全体的に、頻出語は多少の順位の変動は見られるが、テーマとキーワードは、双方ほぼ類似している。両回答とプロ・アマを横断的に見る。まず、「同じ」の項目では、「意見の混在」がどちらも第1位と頻出回数が多い。「意見の混在」とは、選択した回答とそれと相反する内容の回答の双方を記載してあるもの、例えば、両者の発声は同じであると回答はしているが、歌唱法の技術面での相違点を述べているものである。このような記述は、アマチュアでは全回答

表1 回答理由の頻出語比較

＜同じ・どちらかといえば同じ＞						
項目	頻出語 1 位	頻出語 2 位	頻出語 3 位	頻出語 4 位	頻出語 5 位	頻出語 6 位以下
アマ	意見の混在	歌唱技術	合唱の特徴	ソロの特徴	身体の特徴	指導者・指導者・強弱
	同じ・発声・基本	歌い方・声・響き・音色・ビブラート	揃える・ハーモニー・合唱・聴き合う・統一	ソロ・自由・個性・張りのある	空洞・あける・身体・息の流れ	
プロ	意見の混在	歌唱技術	合唱の特徴	身体の特徴	合唱形態	指揮者・指導者・表現・配慮・役割
	同じ・発声・基本	音色・歌い方・ビブラート	揃える・溶け込む・ハーモニー	身体・支え	パート	
＜異なる・どちらかといえば異なる＞						
項目	頻出語 1 位	頻出語 2 位	頻出語 3 位	頻出語 4 位	頻出語 5 位	頻出語 6 位以下
アマ	合唱の特徴	歌唱技術	ソロの特徴	合唱形態	意見の混在	指揮者・指導者・表現・感情・多様・能力
	揃える・ハーモニー・バランス・まとめる	声量・響き・音色・ビブラート・発声	個性・目立つ・ソロ・自由・届ける	パート・周り・他のパート・全体	違う・発声・同じ	
プロ	合唱の特徴	歌唱技術	ソロの特徴	意見の混在	合唱形態	指揮者・指導者・表現・テクニク・多様
	ハーモニー・合唱・揃える・うすい・溶け込む	音色・響き・声量・ビブラート・声	ソロ・主張・個性	同じ・発声・基本	周り・他のパート・パート	

*頻出語の上段はテーマ、下段はキーワードを示す。

者の54%、プロでは38%に見られた。その他のテーマについては、頻出語第2位、第3位に「歌唱技術」「合唱の特徴」が続き、プロ・アマとも同じ傾向が見られた。他方、「異なる・どちらかといえば異なる」の中では、頻出語第1位から第3位に「合唱の特徴」「歌唱技術」「ソロの特徴」が挙がり、これもプロ・アマとも同一の傾向が見られた。「意見の混在」で発声と同じであると付記したものは、アマチュアでは回答者の6%、プロでは23%に見られた。また、頻出語6位以下に記載してある指揮者・指導者については、両回答のアマチュア・プロとも共通していることから、指導者の意向も少なからず影響していることが推察できる。

次に、自由記述式で得た回答の中から、典型的な意見を紹介する(表2)。表では、回答意見を便宜上、選択式の回答で合唱とソロの発声について「同じである・どちらかといえば同じである」を選択した回答と「異なる・どちらかといえば異なる」を選択した回答に分けて掲げている。各意見には、表1で分類されたテーマおよびそれに関連するキーワードが包括されているため、合唱歌唱、ソロ歌唱、合唱の問題意識、意見の混在に関する言

及に分け、下線等により区別を示している。意見の選定にあたっては、表1に示したテーマを含んでいること、わかりやすく表現していることを重視した。

プロとアマの回答を総合的にみると、「同じ・どちらかといえば同じ」という回答を選択した場合は、発声の基礎は同じであるという考えを有した上で、ソロと合唱の演奏表現技術の相違も認識している。一方、「異なる・どちらかといえば異なる」という回答を選択した場合は、発声という用語を実際の演奏時の表現技術に重点を置いた意味に解釈しており、そのために両者の発声は異なるという回答している。回答の選択理由として挙げられた事項はアマ、プロでほぼ同様の内容で、合唱では“周囲との調和”であり、ソロでは“個性の表出”が主要な点である。

以上のように「発声」という用語の解釈が単純ではなく、回答者の意識の在り方により、同じ事実認識を有していても異なる回答となり得ることが自由記述から明らかとなった。このような事情のために、今回の問いに対しても「同じ」と「異なる」に回答が分かれたと考えられるが、二つの歌唱に対する演奏技術の相違に関しては、プロとアマともほぼ類似した認識を有していることがわかった。

表2 合唱歌唱とソロ歌唱の発声の捉え方(自由記述より抜粋)

	アマチュア合唱団	プロ合唱団
同じ・どちらかとい	<ul style="list-style-type: none"> ・良い発声法は同じである ・発声に関してはおなじである。体を楽器と考えるから。 ・理想的な発声そのものは同じと考える。合唱とソロの演奏形態の違いで表現方法は違って当然と考える。 ・合唱の発声は、ソロの発声に比べて更に必要な力が多々ある。その人の感じ方や個性で自由に表現できるのがソロで合唱は指導者の曲の作り方に従って団員と声を合わせて表現していくもので発声の違いはない。 ・声の出しかたは同じで、合唱の場合は、パートバランスやパート内の声に合わせて柔軟に調整できる声 	<ul style="list-style-type: none"> ・声を出す作業に違いはない。違いをつけるとノドを痛める。 ・歌の発声の基本はいっしょだと思ふから。 ・ソロは表現や音色等が個々ですが、合唱は指揮者の求める音色やプレスの位置等々、細々と決められることが多いです。しかしいずれにしても、発声は、基本的に変わらず常に自分にとってよい響きの発声をしなければソロをしても合唱をしても歌はお客様に届けられないと思います。 ・根本的には同じだが、合唱はハーモニーの中の音なので、溶け込むように色々と制約はあると思う。 ・正しい発声は一つだと思ふから。 ・声を揃える＝個性を消すこと。合唱団員であろうと、

え ば 同 じ	<p>を理想と考えています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本は同じだが、合唱は全体に溶け込む声、ビブラートのない真つぐな声を使うがソロはもっと自由。 ・声量、音色の調整は必要と思うが基礎は同じと思う。 ・発声としては同じなのかと思うが、合唱となると周囲と合わせる、互いの声を聴き合うという点が違う。 	<p>演奏家は「いい音」だけを追求し、まとめるのは指揮者であるべき。全員が自分の一番いい音が鳴る位置で歌うべき。かといって、オペラ歌手の声合戦のようになっている、第九のソリストのアンサンブルのようにはなっていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌い方と言う言い方があれば異なると思うが、声を発することに關しては、歌うことは同じだと考えます。
異 な る ・ ど ち ら か と い え ば 異 な る	<ul style="list-style-type: none"> ・ソロは会場いっばいに響く豊かな声が必要と思う。合唱は他の人の声と溶け込む声がいいと思うので、そもそも<u>発声はソロも合唱も異なるとは思わない</u>が、楽曲を歌っていく上では違ってくると思う。 ・合唱の場合は自分一人の歌い方ではなく、周りの同じパートの人や、他のパートの人の声を聴きながらそこに自分を和合していくことが大切だと思う。ソロの場合は響きや声量など、自分の声に神経を持つていくこと ・合唱は調和、ソロは表現力が求められるから。 ・合唱は自分の音を溶け込ませる。ソロは個性を出す。 ・ソロは一人でフレーズを歌いきるから ・ソロは声の華やかさ、個性、声量が違うと思う。 ・ソロでは、個性的な発声も自由かと思うが、合唱では、個性的な発声はあまり強調せず、周りの声に合わせてパート全体がまとまるような発声にしなればと思う。 ・ソロでは自分の持てる全ての表現技術を主体的に発揮する。合唱では指揮者の要求する音楽に則した発声、音色、効果を提示し客観的に選択され基本的に協調感が求められる。 ・ソロは声の色を大切に。ビブラートもあり。合唱は音質が均一の方がよい ・合唱は他とのバランスがあるので、あまり目立つような音質・音量は望ましくないが、ソロの場合はその人の独特な声が目立つ方が必要と思う ・ソロは一人でのびのびと歌えば良い。合唱はすべての面で周りとの調整が必要である。 ・ソロはその人の個性で表現の方法（歌い方）が変わると思う。合唱はハーモニーが大切なので、一人だけ目立つことのないように歌うので、合唱とソロは異なっていると思います。 ・合唱は相手の音を聴き、お互いのハーモニーが一つになって奏でられるもの。ソロは曲に合った個性を歌い分けるもの。 ・合唱の場合は、自分だけ飛び出さないように各自の音色、音質をそろえ周りの声を聴く。ソロは自由に響かせ主張する。基本は変わらないが少し違う。 ・ソロは自分のペースで歌いたいように歌えばよいが、合唱は周りとの声質、テンポなどを良く聴いて合わせないといけない。 ・ソロはより響きさせるためにビブラートを多用するが、合唱ではノンビブラート。 ・合唱ではハーモニーづくりが必要なため、ある程度音量が必要なソロよりも周りとのバランスを考えた発声が必要と思われる。 ・ソロは声に個性を作ること考えている。ビブラートをはじめ、技術的なことを重視している。合唱の場合はいかに他の人の声をきいて、響きを揃えたり、ハーモニーを整えることを重視するので、根本的に違う。 ・基本的な体の使い方は同じかもしれないが、より大きな声、遠くまで届く声を出すために響きのポイントが違ったように思う。 ・発声は同じだが、合唱はハーモニーを合わせるので声量のバランス、ノンビブラートなど、音楽表現も指揮者に合わせる必要があるかと思う。 ・ソロは個性が出る。ビブラート入れて響かせることが多い。合唱はハーモニーが大切。でも、体の支えが重要なのは同じと思っています。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一般的な合唱は色々な声の方々と一緒に歌うので、響きを他の方と合わせていく様にバランスを取っていくので、向き、不向きがあると思います。オペラなどの合唱は、それぞれ指導する方の方向性によって変わってくると思います。個々の個性を活かした（ソロで歌うような感覚の）集合体の合唱だったり、それぞれが可もなく不可もなくの（一つの集合体として成立するような）合唱だったり。ソロは、その曲の内容、曲想、人物の性格などで音色を多様に使う、多様に表現できる発声、音の色が必要だと思います。 ・歌い始めに、合唱においては、クオリティを合わせる<u>ことが優先される（発声に無理が生じる）</u>。ソロにおいては、正しい自分の声が生まれる作業に集中できる。 ・自分の声をみつけ発声の土台を作るという点は同じかと思いますが、ハーモニーをつくる時に求められる技術はソロとはまた異なる気がします。曲の性質にもよる。 ・合唱で歌う場合には、結果として周囲の声とまざるが必要になってくる。アンサンブルとして和声を完成させる為には、器楽的要素や、和音構成音の役割を配慮することが必要で、周りの声や音を聴くことがとても重要だから。 ・合唱団の中で一員として歌う場合と、合唱付きのソロをする際は明らかに求められる音色が異なると思います。合唱は全体の響きにとけこむこと、ソロは合唱やオーケストラと同じ音程を歌う場合も「ソリストの音」が際立つことを求められると思います。（両立は無理だと考え、卒業後1年程で合唱団は退団しました。） ・基礎は同じだと思います。演奏する合唱曲によってはビブラートが適さないこともありますし、ソロと同じに歌えないことも多いと思います。よって、合唱、アンサンブルをする人、合唱、アンサンブルもし、ソロも歌う人、ソロのみやっていく人と分けられると思います。 ・発声が、というより発声時の意識が違うというべきか。声量の意識も、声質を合わせる意識も、ソロより神経を使う。 ・合唱の場合には、全体のバランスが1番大切になってくるので、声量はおさえて歌っています。響きなどに関しては、ほぼ同じだと思います。 ・基本的にはソロと合唱の発声は同じはずだが、合唱の場合ハーモニー（響き、音色 etc.）を他パートと合わせる必要上、響き、声の大きさ等を他者とあわせようとする為、自分の声をセーブしながら歌う為に、うすっぺらな発声になったり、本来自分の持っている声を出し切ることが出来ない。 ・私はオペラの曲が中心なので、普段通り歌うと合唱の時に混じらない声になる。普段歌曲中心のほうは特に変えていないかも。 ・ソロ活動の場合は、オペラを歌うことが多くアンサンブルの時とは、ハーモニーを大切にするので発声の声量が違う。 ・響きの感覚・出し方がソロと違って浅く出しているから。（和声重視） ・合唱では響きを合わせ、ソロでは個性やスケールの大きさを必要とするため。 ・音色、音圧、ビブラート等の変化により調和の声、ソロ的な主張のある声を使い分けるため。

* 下線部は合唱歌唱に関する言及、網掛け部分はソロの特徴に関する言及、波線は合唱歌唱への問題意識、□は意見が混在している言及を示す。

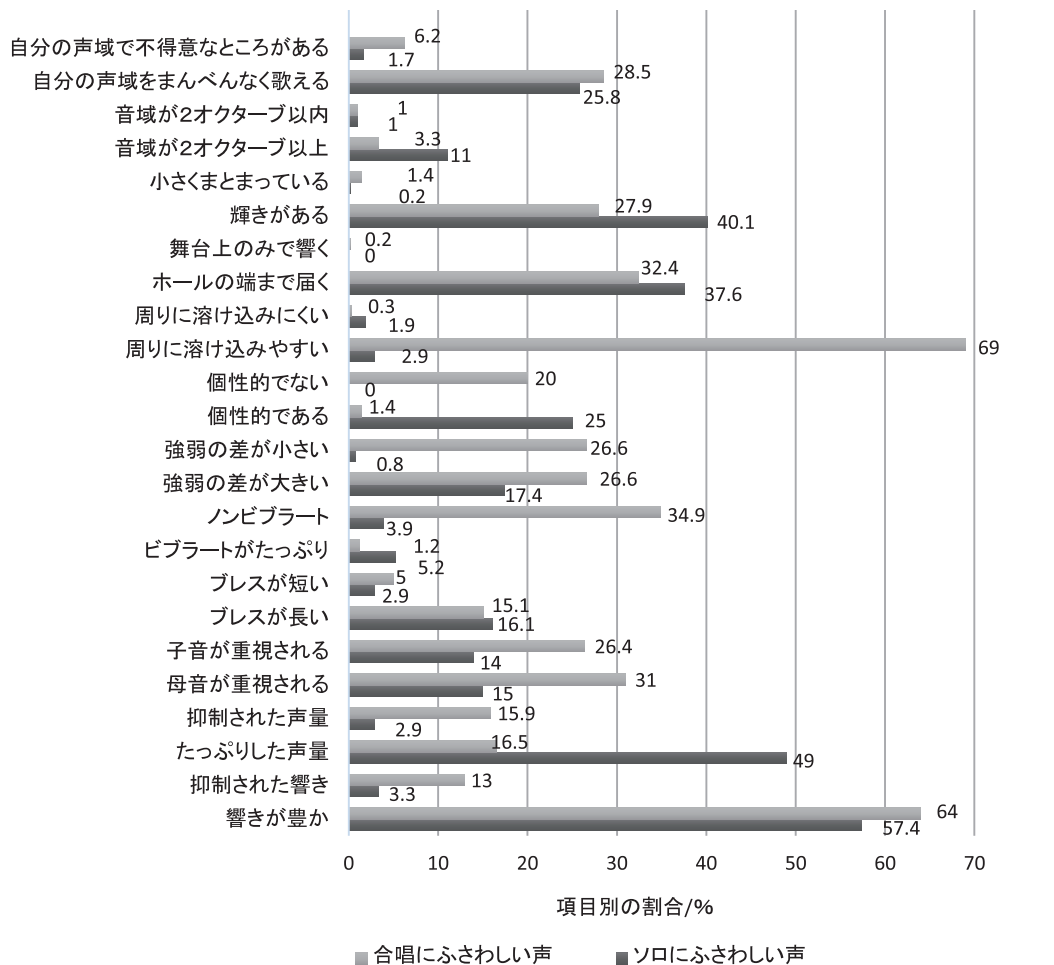


図3 合唱歌唱とソロ歌唱にふさわしい声に対するアマチュア合唱団員の捉え方

また、演奏経験の違いから、アマとは異なる問題意識を有しているプロの存在も明らかとなった。その他、指揮者の意向によって、演奏表現が変わるといった意見もあった。

(3) 合唱歌唱とソロ歌唱にふさわしい声に対するアマチュア合唱団員の捉え方

アマチュア合唱団は、ソロと合唱の声をどう見ているのかについて、声質や発声技術に関する25項目の選択肢から、特に重視するものを最大7項目まで選択する方法で調査を行った。結果を図3に示す。

調査の結果から、アマチュア合唱団員が合唱にふさわしい声、あるいはソロにふさわしい声と捉えている特徴のうち、高い割合を示した項目を3点挙げると次のようになる。

- 1) 合唱にふさわしい声：
 - ①周りに溶け込みやすい声 (69%)
 - ②響きが豊かな声 (64%)
 - ③ノンビブラートの声 (34.9%)
- 2) ソロにふさわしい声：
 - ①響きが豊かな声 (57.4%)
 - ②声量がある声 (49%)
 - ③輝きのある声 (40.1%)

また、合唱にふさわしい声とソロにふさわしい声の間に明確な大きな差が出ている項目が認められる。合唱歌唱にふさわしい声と多くの団員が捉えているが、ソロ歌唱にふさわしい声とは多くの団員が捉えていない項目として、「周りに溶け込みやすい声」(66%の差異)「ノンビブラートの声」(31%の差異)が挙げられる。逆に、合唱歌唱にふさわしい声とは多くの団員が捉えていないが、ソロ歌唱にふさわしい声と多くの団員が捉えている項目として「たっぷりした声量の声」(33%の差異)がある。

他方、下線を引いた「響きの豊かな声」は、合唱とソロの両方に共通して高い割合となっている点に注目したい。響きが豊かというのは、共鳴のある声であり、美しい音色を伴う声である。また、咽頭、口腔、鼻腔などの共鳴腔を巧みに協同させることで、声の音色をコントロールできる⁽²⁴⁾。言い換えれば、響く声は、ソロの個性的な音色を作るだけでなく、合唱のような大人数の声になっても溶け込みやすい声に調節されるといえるだろう。

(4) 合唱歌唱とソロ歌唱の留意点 (プロ合唱団)

プロ歌手の合唱団員は、通常、合唱とソロという両様の活動をしている。彼等がソロ活動または合唱で歌っている時、特にどのような点に気をつけて歌っているか、

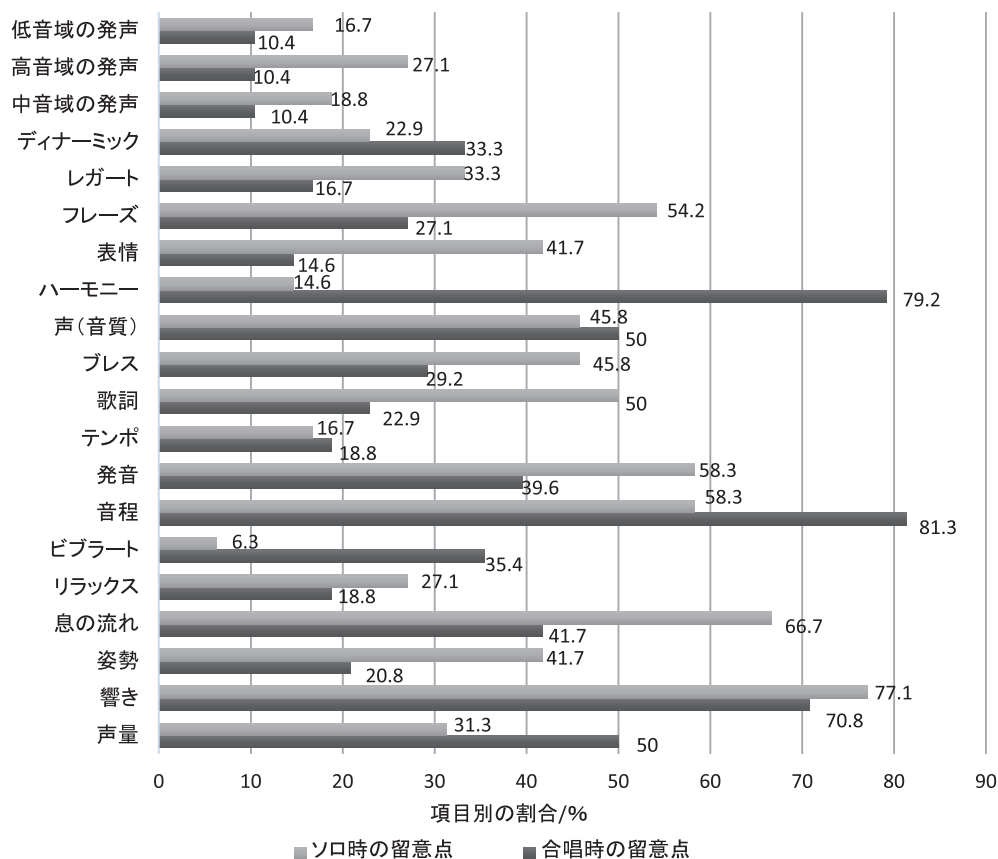


図4 ソロ歌唱と合唱歌唱の留意点（プロの合唱団の回答）

20 項目の質問事項から特に重視するものを最大7項目まで選択するという方法で回答を得た。回答の結果を図4に示す。

この結果から、プロ歌手がソロ歌唱時に留意している割合の高い項目は、響き（77.1%）、息の流れ（66.7%）、音程・発音（58.3%）、フレーズ（54.2%）、声・ブレス（45.8%）の順であることがわかる。他方、ソロ歌唱時に留意される割合が最も低い項目は「ビブラート」（6.3%）である。次に、合唱歌唱時に留意されている割合が特に高い項目は、音程（81.3%）、ハーモニー（79.2%）、響き（70.8%）の3項目で、それに続いて、音質（50%）、声量（50%）、息の流れ（41.7%）の順となっている。他方、合唱歌唱時に留意される割合が最も低い項目は、低音域の発声、高音域の発声、中音域の発声で、共に10.4%である。

これらの結果からわかることは、プロ合唱団員は、ソロ歌唱の場合には、「響き」をはじめ、息の流れ、フレーズ、ブレスなど、発声に関する事項全般にわたり注意を払っているということである。他方、合唱歌唱の場合では、音程、ハーモニー、響きの3項目が70%から80%と特に高く、音質等3項目は40%から50%と注意の払われ方の程度に差が見られ、2群に分かれている。また、「ビブラート」の項目は、ソロ歌唱時の6%と比べ、35%と割合が高くなっていることが注目される。

次に、合唱とソロという歌唱形態の違いによる、注意の払われ方の差異に注目し、両者の差の大きい項目を取り上げてみる。合唱歌唱時により強く注意が払われていた項目は、ハーモニー（64.6%の差異）、ビブラート（29.1%の差異）、音程（23%の差異）となっている。一方、ソロ歌唱時には、歌詞（27.1%の差異）、表情（27.1%の差異）、フレーズ（27.1%の差異）、息の流れ（25%差異）、姿勢（20.9%差異）となっている。これらの事実は、プロ合唱団員は、ソロ歌唱時の発声重視から、合唱歌唱時ではハーモニー重視に意識を切り替えて歌唱していると推察できる。また、ソロ歌唱と合唱歌唱に共通して留意する意識が高かったのは、「響き」の項目であったことも注目される。

(5) 合唱歌唱時の留意点のアマチュア合唱団とプロ合唱団の比較

合唱歌唱時の留意点をアマチュア合唱団員とプロ合唱団員で比較分析した。留意点を項目別に比較した結果を図5に示す。

アマチュアの合唱団員は、音程（77.9%）、響き（67.6%）、ハーモニー（59.1%）、の3項目が比較的高く、続いて、姿勢（50%）、発音（42.2%）、息の流れ（40.3%）となっている。一方、プロの合唱団員は、図4の考察で述べたとおり、音程（81.3%）、ハーモニー（79.2%）、響き（70.8%）

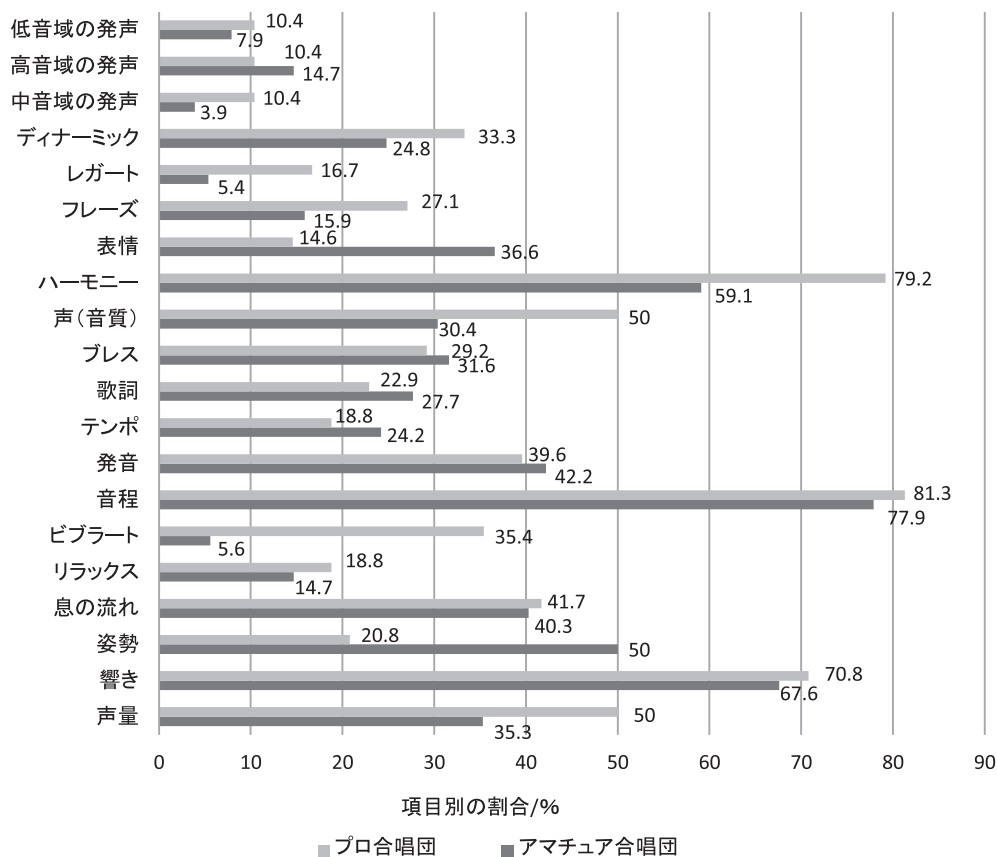


図5 合唱歌唱の留意点（プロとアマチュア合唱団の比較）

が特に高く、その他の項目は50%以下と2群に分かれている。このように、合唱歌唱に対しては、プロとアマチュア合唱団の両者とも「音程」、「響き」、「ハーモニー」の留意点が高かったことから、合唱歌唱時の注意の向け方は、両合唱団でほぼ同じ傾向であることがわかった。他方、興味深いのは、プロとアマで差が見られた項目である（図6）。図の縦軸は両者の項目別の割合の差を表す。グラフで示している濃い色の項目は、プロ合唱団員が高く、薄い色の項目は、アマチュア合唱団員が高かった項目である。

意識の差が最も大きかった「ビブラート」については、プロ合唱団員は合唱歌唱時には特に、ビブラートをとる

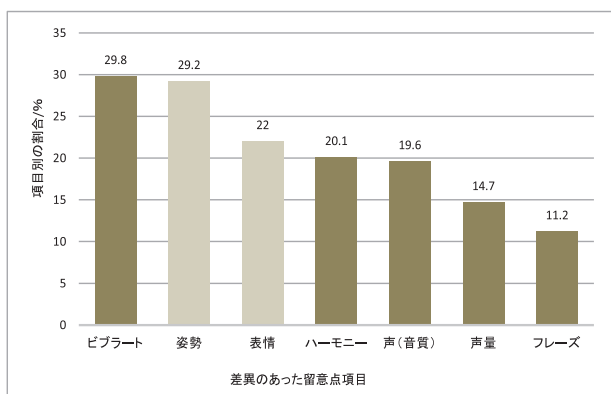


図6 アマチュアとプロ合唱団で合唱歌唱の留意点で差異が大きかった項目

よう留意し、さらに「ハーモニー」、「声質」、「声量」に注意を払っていることがわかる。アマチュア合唱団は、「姿勢」、「表情」の留意事項が高いことから、身体を楽器としたよりよい発声を得るための注意を払っていることがわかる。このように、プロ歌手は、合唱歌唱に切り替えるために、ビブラートや声量のコントロールをしようとする一方、アマチュアは、発声を重視し、姿勢、表情に留意しようとしていることが推察できる。

3. 質問紙調査のまとめ

- (1) 合唱とソロの発声の認識について、合唱とソロという歌唱形態による「声の使い方の違い」を「発声が異なる」と捉えている団員が両合唱団とも過半数を占めている。しかし、その選択理由を比較すると、両者の発声の基礎に対する認識はほぼ一致していることがわかった。
- (2) アマチュアの合唱団員は、合唱にふさわしい声を「溶け込みやすい声」、「響きが豊かな声」、「ノンビブラートの声」と捉え、ソロにふさわしい声を「響きが豊かな声」、「声量がある声」、「輝きのある声」と捉えている。
- (3) プロ合唱団員は、ソロ歌唱時には、「響き」、「息の流れ」、「発音・音程」に留意し、合唱歌唱時には、「音程」「ハーモニー」「響き」に留意している。
- (4) アマチュア・プロの合唱団員ともに、合唱歌唱時には、

「響き」, 「音程」, 「ハーモニー」に留意している。

- (5) アマチュア・プロの合唱団員ともに, ソロ及び合唱の歌唱形態に関わらず, 歌唱時には, 「声の響き」を重要と捉えている。
- (6) プロ合唱団員は, 合唱歌唱時に溶け合った合唱を目指して, 「ビブラート」, 「ハーモニー」, 「声量」, 「音質」の調整を行っている一方, アマチュア合唱団員は, 合唱歌唱時にいい発声を目指して, 「呼吸」, 「姿勢」や「表情」を意識している。

IV. まとめ

合唱歌唱に参加しているアマチュア合唱団員とプロ合唱団員は, 合唱歌唱の発声をそれぞれどのように捉えているのか, またソロの発声との相違をどのように理解しているのか。本稿では, これらの疑問を明らかにするために, それぞれの合唱団員に対して質問紙調査を行った。その結果, 両合唱団員は, 発声の基礎は同じとした上で, ソロ歌唱と合唱歌唱それぞれの特徴を認識し, 両歌唱に適した発声技術で歌唱しようとしていることが明らかになった。アマチュア合唱団員は, 合唱歌唱時には, 呼吸や姿勢などに気をつけ, よりいい発声を目指していること, プロ合唱団員は, ハーモニーやビブラートに気をつけ, 溶け合った合唱を目指していることがわかった。また, 歌唱形態やプロ・アマチュアの別に関わらず, 声の響きを重要と捉えられていることも明らかになった。

合唱とソロの発声の基礎は, 無理のない, 喉を酷使しない声楽発声である。合唱とソロの発声の理想的な姿は, この基礎を土台に, 合唱とソロの双方の発声技術を獲得することにあるのではなかろうか。本研究で行った発声に対する意識調査でも, 声楽発声に基づいたうえで, プロとアマチュアの合唱団員は両歌唱の特徴を的確に捉えていた。本研究で明らかになった合唱歌唱とソロ歌唱の特徴を認識した上で, プロ, アマチュアを問わず, 個々の歌い手が, 合唱歌唱に必要な発声技術をいかに向上させていくかが演奏表現の高度化にとって重要である。これらの発声技術の向上によって, 個々の歌い手の音楽表現が広がり, ソロと合唱の両立が成立し得ると考える。さらに, 指導者がソロと合唱の歌唱技術の相違を認識し, 合唱指導にソロ歌唱の特徴を取り入れる等, 工夫を加えることで, 幅広い年代にわたる合唱初心者はもちろん合唱熟練者に対する合唱教育においても発声理解しやすくなり, 合唱に対する意識の明確化や歌唱力向上にもつながると期待される。

— 注 —

- 1 全日本合唱連盟ホームページ
<http://www.jcanet.or.jp/profile/jca-gaiyo.htm> (2017年1月11日閲覧)
- 2 一般のアマチュア合唱団は, 全日本合唱連盟に所属しているお母さんコーラス, 男声・混声・女声合唱団。プロ合唱団は, 音楽大学等の声楽科出身で, ソロの演奏活動もしている声楽家集団による合唱団。

— 文 献 —

- (1) Large, J. and Iwata, S., *Aerodynamic study of vibrato and voluntary 'straight tone' pairs in singing*, *Folia Phoniat.* 23 (1), pp.50-65, 1971
- (2) Richard Miller, *Solution for Singers*, Oxford University Press, 2004. リチャード・ミラー, 岸本宏子, 長岡英訳『歌い手と教師のための手引書上手に歌うためのQ & A』音楽之友社, p.332, 2009
- (3) Johan Sundberg, *The Science of The Singing Voice*, Northern Illinois University Press, 1987. ヨハン・スンドベリ, 榊原健一監訳, 伊東みか, 小西友子, 林良子訳『歌声の科学』東京電機大学出版局, pp.144-145, 2007
- (4) Franziska Martienßen-Lohmann, *Der wissende Sänger*, Atlantis Musikbuch, 1956. フランツィスカ・マルティーンセン＝ローマン, 荘智世恵, 中澤英雄共訳『歌唱芸術のすべて』音楽之友社, p.72, 1994
- (5) 虫真眞砂子「フィンランドの合唱教育に関する一考察」『声楽発声研究』No.3, pp.23-24, 2012
- (6) 青木八郎他編『合唱講座3実技篇』音楽之友社, p.8, 1957
- (7) Frederick Husler and Yvonne Rodd-Marling, *Singen: Die physische Natur des Stimmorganes; Anleitung zum Aufschließen der Singstimme*, Schott Musik, 1965. フレデリック・フースラー, イヴォンヌ・ロッド＝マーリング, 須永義雄, 大熊文子訳『うたうこと 発声器官の肉体的特質—歌声のひみつを解くかぎ』音楽之友社, p.158, 1987
- (8) 前掲書(7), p.158
- (9) 酒井弘『新版発声的技巧とその活用法』音楽之友社, p.143, 1974
- (10) 前掲書(9), p.145
- (11) 前掲書(3), pp.144-145
- (12) Goodwin, A., *Acoustic study of individual voices in choral blend*, *Journal of Research in Music Education*, 28 (2), pp.124-125, 1980
- (13) Rossing, T., Sundberg, J. and Ternstrom, S., *Acoustic comparison of voice use in solo and choir singing*, *Speech Transmission Laboratory Quarterly Progress and Status Report*, 25 (1), pp.30-43, 1984

- (14) 前掲書 (3), pp.117-119, Richard Miller, *The Structure of Singing System and Art in Vocal Technique*, Schirmer Books 1986. リチャード・ミラー, 岸本宏子, 八尋久代訳『歌唱の仕組み』音楽之友社, pp.71-72, 2014. Ingo R. Titze, *Principles of Voice Production*, Prentice Hall, 1994. イング・ティッツェ, 新美成二監訳, 田山二郎, 今泉敏, 山口宏也訳『音声生成の科学; 発声とその障害』医歯薬出版株式会社, pp.182-183, 2003
- (15) 前掲書 (3), p.145
- (16) Walter Schneider, *Einsingen im Chor*, Edition Peters 1972. ヴァルター・シュナイダー, 監修ラインホルト・ベンル, 山内すみえ, 今田理枝訳『合唱の発声練習』シンフォニア, p.5, 2000
- (17) 前掲書 (16), p.5
- (18) Carl Eberhardt, *Praxis der Chorprobe*, Edition Peters 1973. カール・エーバハルト 監修ラインホルト・ベンル, 山内すみえ 今田理枝訳『合唱練習の理論と方法』シンフォニア, p.12, 2001
- (19) 監修清水敬一『必ず役立つ合唱の本』音楽之友社 pp.16-31, 2013 (担当執筆 小針洵子)
- (20) 清水敬一『合唱指導テクニックー基礎から実践まで』NHN 出版, pp.8-9, 2012
- (21) 青島広志『はじめよう! 合唱』全音楽譜出版社, p.12, 2006
- (22) 田中信昭『絶対! うまくなる 合唱 100 のコツ』ヤマハミュージックメディア p.10, 2014
- (23) 前掲書 (22), p.54
- (24) Richard Miller, *The Structure of Singing System and Art in Vocal Technique*, Schirmer Books, 1986. リチャード・ミラー, 岸本宏子, 八尋久代訳『歌唱の仕組み』音楽之友社, p.64, 2014

— 謝 辞 —

ご多忙の中、質問紙調査にご協力いただきました一般のアマチュア合唱団およびプロの合唱団の団員の皆さまに心より感謝いたします。

— 付 記 —

本稿は、平成 28 年度日本声楽発声学会第 103 回例会において行なった研究発表「合唱とソロの発声を考える」をもとに加筆修正したものである。さらに、本稿は、科学研究費補助金基盤研究 C「合唱歌唱とソロ歌唱の発声比較の視点から見た歌唱教育の再構築ー発声の可視化の活用ー」課題番号: 16K04690 の研究成果の一部である。